



大町文庫

新潟県の最北端にある村上市で素晴らしい場所に出会いました。きっかけは、地元の方の紹介です。美味しい魚を出してくれる店として、教えていただきました。海鮮一簾(いちびれ)というお店です。大町文庫という黒い建物のなかにあります。

教えていただいた場所から2~3分歩くと、黒壁2階建ての立派な建物に行き着きました。大町文庫という看板が出ています。



中嶋哲夫の「人事も歩けば」



「文庫」がふさわしい佇まい。飲食店の雰囲気はありません。幟で店だとわかりますが、店らしくはありません。文庫に入ると螺旋階段、その奥にカフェ。まわりを書棚が取り囲みます。2階は書棚だけ。本間桂先生、

大嶋久夫先生、八木三男先生の蔵書と書かれ、見事に整頓されています。持ち出しは不可ですが、カフェで「マイ栗」を入れて読むことができます。並んでいる本は並々ならぬ知性を感じさせます。村上出身の新潟大学の先生の蔵書? そう思いながらみていました。

置いてあった「通信」を読むと、3人は村上高校の先生。本間先生は英文法の先生。文法を教える例文を、古典から引用して板書される。八木先生は日本史。ドラマのように日本史を語る先生。大嶋先生はため息が出るような英文和訳を行われる先生。どの先生も、5,000冊もの蔵書の隙間で生活されていたそうです。

文庫を作った方は、1970年代に高校生活を



▲恩師の蔵書を取めた私設文庫「大町文庫」

送り、3人の恩師に大きな影響を受けた生徒。「個人でこれだけ本を集め、読まれた、その迫力を体感してほしい。村上に素晴らしい先生がおられたことを喜んでほしい」という思いをホームページで語られています。ご遺族が引き取れない膨大な蔵書、地元での教育に取り組んだ恩師の蔵書、それらを地元の方が読めるようにされたわけです。

文庫を開設した方は、ご自身の生地(町外れの海岸の集落)でクリニックを開業されています。テナントとして入っている海鮮一簾の社長は同級生。文庫の隣で魚加工品を扱う「うおや」を経営されています。お二人がタッグを組んで、大町文庫が開設されたとのこと。お茶や食事ができることで、自然に書棚に触れ、たまたま手に取った本から世界が広がる。大町文庫の取組みに、人が育つことの原点をみた想いがします。

(MBO実践支援センター代表 大阪商業大学特任教授)